

# 「よ・つ・や」頭を鍛える

企業経営漫談士 岡野実空

「よつや」。駅名以外には聞くことのない言葉ですが、ここでは「良(よ)い」「強(つよ)い」「柔(やわ)らかい」という脳の働きの形容詞の頭文字3つ。社会が求めるその優先順位は時代や状況によって変わりますが、かつてトップだった「良い」はいまや単なる必要条件となり、いまや「強い」や「柔らかい」という十分条件の価値が急浮上しています。

## よ: 良い

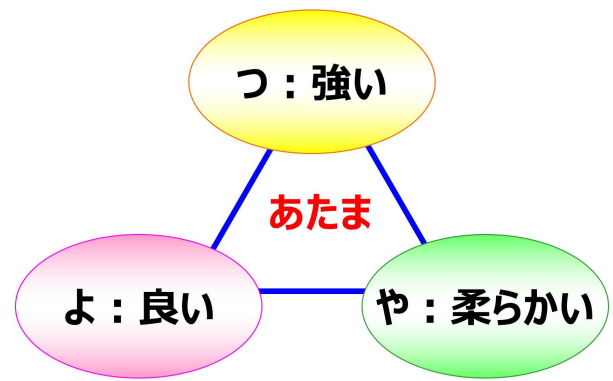
ミスター半導体・故西澤潤一氏は、かつて講演で、企業が採用すべき人材を、「頭が良く、成績の悪い学生」と一言で表しました。それは新しいことを考えるのが大好きで、過去や現在の事象にはあまり興味がない(従って学校の成績が悪い)タイプを探れ、という学歴偏重への警告。しかし「成績」という物差しを持たない人事部が採用窓口では、該当者の大半は選から漏れてしまいます。もっとも「新し物好き」ならだれでも可、というわけでもありません。「知識」以外で、私たちが頭の「良い」人と判定するポイントは、「コミュニケーション能力」。複雑化した社会の中で、世代や職業などの違う相手に合わせ、自分の考えや知識を伝えることができる一方、他人の意見などもしっかりくみ取ることができる「共感性」の高さです。

それにしても、頭が「良い」人の「話」や「文章」は、難しいテーマでも、とにかく分かりやすい！

## つ: 強い

企業が獲得すべきこの希少人材については、ドラッカー氏から解説を。「頭の良い者が、しばしば、呆れるほど成果をあげられない。彼らは、知的な能力が、そのまま成果に結びつくものではないということを十分認識していない」。「知力や想像力や知識は、あくまでも基礎的な資質である。それらの資質を成果に結びつけるには、成果をあげるための能力が必要である」。ということで、その能力、すなわち頭の「強い」人間は、彼が上げる5つの習慣(時間管理、貢献、強み、領域集中、意思決定)の徹底に努めます。『経営者の条件』はその優れたマニュアルですが、多くの読者がその内容を実行できないのは、私たちの記憶の限界、3つを越えた5つのためか？(『7つの習慣』はもっとムリ?) また原題の“EXECUTIVE”を「経営者」ではなく、「やり切る(EXECUTE)人間」と訳していれば、もっと多くの企業人が読んだかも？

## KM 3-2 「よ・つ・や」頭を鍛える



## や: 柔らかい

頭が「柔らかい」とは、「状況に応じて融通がきく」(広辞苑)、また頭の中にそのための「引出しが多い」という表現もよく使われます。別のコラムで取り上げた「三多」「三上」で多様な「引出し」を作っておき、仕事や議論が行き詰まったとき、一見関係ない分野から「ネタ」を取り出し、ボトルネックに注入、それを突破するのが、頭の「柔らかさ」の正体。またそのためには、違う分野同士をつなぐ「メタファー(隠喩)」を考える「抽象化能力」も磨いておかなければなりません。その本質は、「母国語」の習熟。私たちの零線に触れる「やまとことば」から、国語の一部となった「漢語」「カタカナ語」まで、「日本語シナプス」を大いに磨き、ここぞ！というときの「連結」に備えましょう。

名経営者は、「よつや」見本。しかしミドルの皆さんが目指すのは、集団「よつや」。「ミッション、ビジョン、パッション」+「5つの習慣」で頭を「強く」し、その実現に向け「良い」知識を出し合い、そのボトルネックやジレンマを「柔らかく」突破する集団行動です。それを先導する皆さんのメンバーへの問いかけは、まず「君の名は?」。(映画「君の名は。」の舞台の一つ、四谷に因み) 次の問いは、「君の頭は、よ・つ・や?」。(パワハラ注意)

2019年8月13日(初出平成29年8月7日) 実空